

ソーシャル・キャピタル論における文化芸術と市民的参加

Arts and Civic Participation in Social Capital Theory

小藪明生 (早稲田大学非常勤講師)

「ソーシャル・キャピタル (社会関係資本、Social Capital、以下 SC)」は、1980年代に「人的資本」概念が経済資本概念の拡張として登場したのにつづいて、1990年代にさまざまな社会的問題の解決の基盤となるものとして注目されるようになった概念で、社会学のみならず経済学、政治学、公共政策、社会福祉、社会心理学等の様々な出身学問分野の研究者が議論に参加している。

SCの定義についてはさまざまなバリエーションがあり SC概念の曖昧さとして批判の対象ともなっているが、特に現代先進諸国において蓄積・醸成が必要とされる関係性とは、政治学者パットナムが論じたような、人々の草の根的・対面的・自発的な社会参加とそこで作られる水平的な関係性である。パットナムは話題となった著書『孤独なボウリング』において、人々が身近な人々と私的領域に引きこもり草の根的でボトムアップの社会参加をしなくなってしまうことを憂いたが、同様の懸念は多くの先進諸国で共有されている。

また、SC論において重視される自発的な社会参加であるが、集団に所属しさえすればそれがどのようなタイプのどんな構造の集団であってもよいというわけではなく、閉鎖性の少ない、水平的な関係性を育む集団のほうが望ましいとされる。その点、文化芸術系やスポーツなどの趣味の会は、多様な成員を含む開放的で持続的な社会参加を見込めるため、自発的な社会参加の重要な経路として有望視されている。

さらにパットナムはその著書『Better Together』において、単に文化芸術の鑑賞者 (art appreciators) であるだけでも価値があるが、アートとの相互作用があること、文化芸術に関わる人々を“芸術参加者 (art participators)”に変換しようとするときに、自発的な社会参加の経路となり、集団・コミュニティ“間”を架橋することを助けるような働きをし、SCを豊かなものとする論じている。